特集

未来へつなごう伝統の響き

五穀豊穣（じょう）、子孫繁栄を願い、鎮守の祭りで奉納されてきたお囃子（はや）、獅子舞、万作踊り。時代が変わっても私たちのくらしの中に息づいている郷土の芸能。伝統を守り、受け継がれてきた技と舞いをぜひご堪能ください。

第14回 北本市郷土芸能大会

2月17日（日）12:30開場 13:00開演

北本市文化センターホール 定員：710人

■出演団体　荒井囃子保存会、北中丸囃子連、北本宿囃子連、北本四丁目囃子連、顕揚会
■特別出演　砂囃子連、中丸なかよし会
■入場方法　入場無料。入場整理券を生涯学習課、文化センターの中央公民館、各地域学習センター（地区公民館、勤労福祉センター、コミュニティセンター、学習センター）、野外活動センターで配布しています。
問 生涯学習課文化財保護担当（☎594-5566）

北本市郷土芸能大会

14回目を迎える「北本市郷土芸能大会」は、市内に残る獅子舞、囃子、剣武（舞）等の郷土芸能・古典芸能の発表を通じて、郷土芸能への理解と後継者育成を目的に毎年開催されています。

昨年は、秩父屋台囃子をお招きし、市内外の大勢の皆さんからご好評をいただきました。

今回は、北本市郷土芸能保存団体連合会から5団体、ゲストに中丸なかよし会、東大宮「砂囃子連」をお迎えして開催します。

北本市郷土芸能保存団体連合会とは

「北本市郷土芸能保存団体連合会」は、貴重な郷土芸能を末永く後世に継承・発展させていくことを目的に、昭和54年に発足しました。市内外の保存団体との交流を図り、郷土芸能の保存と伝承に取り組んだ結果、一時は消滅の危機にあった「鎮守の森から聞こえていた笛や太鼓の音」も復活し、市内のお祭りやイベントを始め、市外各地で開催される郷土芸能祭りにも積極的に参加しています。

郷土芸能は、古くから人々の生活の営みの中で、大自然や神々に向けての祈りや感謝の気持ちから生まれ、ふるさとの風土に育まれながら今日まで受け継がれてきました。

北本市の郷土芸能

豊作を祈願して行われる春祈祷（とう）・初午に始まり、厄除けや鎮魂を願う祇園祭り、収穫への感謝を表す秋祭り、そして一年の祝福を祈願する元旦（たん）祭。祭事に奉納されるお囃子や獅子舞は、郷土の誇る芸能として受け継がれ、愛されてきました。

能や歌舞伎（き）、文楽などの創作芸能が、時代によって内容が変化していくのに対し、郷土芸能・民俗芸能は、その地域の人々の生活に密接に関わってきたことから、その形態や様式を正しく伝承していくことが最も尊重されるため、創作芸能には見られない地方色豊かな文化遺産であると言えます。

北本市の郷土芸能は、お囃子、獅子舞、万作踊り、剣武（舞）等で、特に祭り囃子は、徳川幕府以前、神田明神から関東一円に広まった神田囃子の流れをくむもので、明治の始めから20年代・30年代にかけて伝わったものとされています。

現在市内には12の保存団体があり、それぞれの団体が先人から受け継いだ技と伝統を守り、後世に伝えていくために日々練習を重ねています。

宵まつりに花を添える山車とひっかわせ

毎年11月に行われる北本まつりの宵まつり。夕闇が迫るころ、祭り囃子が聞こえてくると心が躍ります。水引幕、提灯、花で飾ったにぎやかな山車の上で大人に交じって子どもたちが一生懸命太鼓をたたき、おかめ、ひょっとこがおどけて祭りを盛り上げます。最後は囃子のひっかわせ。祭りのフィナーレを飾ります。翌日の産業まつりでは獅子舞、お囃子も好評を博し、郷土芸能は、北本まつりになくてはならない存在となっています。

伝統を引き継ぐ子どもたち

今、日本各地で郷土芸能や伝統行事の多くが、担い手の高齢化や後継者不足、都市文化の進展により、年々失われつつあります。

本市の郷土芸能の中でも、活動を休止せざるを得ない状況となった団体もあります。各保存団体では、地域の子どもたちにいかにして郷土芸能に興味を持ってもらい参加してもらえるか、その方法を模索し、地道な努力を続けています。

■ 市内12郷土芸能保存団体紹介

荒井囃子保存会
（神田囃子木ノ下流）
須賀神社を拠点とし地囃子と木ノ下流囃子、重秋流祭り囃子の保存と普及に努める。練習日は毎週土曜日。
代表者 小久保達夫

北中丸囃子連
（神田囃子杉山流）
明治20年代発足。市内唯一の杉山流。氷川神社、桶川加納天神社他で上演。練習日は毎週日曜日。
代表者 後藤正一

北本宿囃子連
（神田囃子松山流）
本宿天神社を拠点とし、囃子に獅子舞を加え、市内外で精力的に上演している。練習日は毎週水・土曜日。
代表者 渡辺嘉一

北本四丁目囃子連
（神田囃子木ノ下流）
町内の子ども囃子の創設をきっかけに昭和57年に結成。祭り囃子、万作踊りを上演。練習日は毎週土曜日。
代表者 清水宏一郎

別所囃子連
（神田囃子木ノ下流）
宮内氷川神社を拠点に活動。平成15年に山車を新設し、精力的に活動している。練習日は毎週金曜日。
代表者 大川宜久

顕揚会
（神刀流）
大正初期、地域の青少年の精神修養と身体健康を目的に神刀流の支部として上手地区顕揚会を結成。
代表者 金子文男

北原囃子連
（神田囃子木ノ下流）
屋台囃子を中心に氷川神社、八雲神社の祇園祭りで奉納する。練習は祭前の毎週土曜日ほか。
代表者 石井圭司

原組囃子保存会
（神田囃子木ノ下流）
明治30年代発足。八雲神社、氷川神社、倶利伽羅不動尊への奉納を活動の基本とする。練習日は毎週土曜日。
代表者 箕輪昭二

北袋囃子連
（神田囃子木ノ下流）
北袋神社を活動の拠点とし、戦時下の動乱期においても伝承の灯は絶えることなく現在にいたっている。
代表者 新井信洋

石戸宿獅子舞保存会
（ささら獅子舞）
江戸時代中期から石戸宿に受け継がれてきたもので、市指定無形民俗文化財である。（現在は活動休止中）
代表者 井野俊太郎

石戸宿囃子連
（神田囃子）
獅子舞同様、徳川中期より２百数十年の歴史を有する。石戸天神社祭で囃子を奉納する。
代表者 福田良市

上手囃子保存会
（神田囃子木ノ下流）
明治33年発足。氷川神社、八雲神社の祭事に囃子を奉納し五穀豊穣を祈願する。練習は祭前の毎週日曜日ほか。
代表者 松岡忠雄

郷土芸能のこれからへ

未来へつなごう伝統の響き

北本の郷土芸能の伝統を受け継ぎ、後世につなげるため、努力を続ける人たちがいます。そんな人たちへの取材、インタビューから、北本の郷土芸能の魅力と課題が見えてきました。

ずっと続けたい。荒井囃子保存会の子どもたち

市内最大規模のお囃子の団体、荒井囃子保存会。そこでは、多くの子どもたちが楽しそうに練習をしていました。毎週土曜日の夜に集まり、先生役の大人たちに教わりながら練習をしています。子どもたちは親や兄弟に連れられて、または友人の誘いで、囃子保存会に入ったそうです。最初はほとんど触れた事のない太鼓などに戸惑いもあったそうですが、今では、みな上手に太鼓をたたき、鐘を鳴らします。練習後、子どもたちに話を聞くと「楽しい、これからも続けたい」「練習も大変じゃないし、みんなに会えるからいつも来てる」など、みな笑顔で話してくれました。この子どもたちが今後も楽しくお囃子を続け、大人になったとき、自分の子どもにその楽しさを伝えていくことで、郷土の伝統が受け継がれ、守られていきます。

取材当日、笛の音に合わせ、小学校5・6年生を中心に太鼓や鐘を真剣に奏でていました。

素晴らしさを伝えたい

荒井囃子保存会
福島 若菜さん

■始めたきっかけは
北本市郷土芸能大会での姉の姿を見て、私もやってみたいと思いました。

■お囃子で楽しいときは
太鼓、鐘、笛が重なり合って、いい音色が奏でられたとき。

■お囃子に対する思い
楽しそうで始めたお囃子でしたが、やってみて初めて、自分が住んでいる地域の歴史や伝統を知ることができて、本当に良かったです。今は、ずっと続いてきたこの伝統を引き継いでいきたいし、多くの皆さんに郷土芸能の素晴らしさを伝えていきたいです。

■郷土芸能大会に向けて一言
お客さんに喜んでもらえるよう、一生懸命練習します。

伝統を親から子へ。
北中丸囃子連の親子

明治20年代から続く北中丸囃子連。そこで、伝統を守り継ぐ努力を続ける親子がいます。石川直紀さん・航希君親子。北本市郷土芸能大会では親子そろってひょっとこ踊りをお囃子にあわせて披露しています。

子どもと踊りたかった

直紀さんは、上尾市平方の生まれで、平方で行われている「どろいんきょ」と呼ばれるお祭りに参加していたそうです。「物心つく頃には、父親にひょっとこ踊りを教えられ、一緒に踊っていました。色々なお祭りに父親と参加したことはいい思い出です。自分も子どもができたら、子どもと一緒に踊りたいと思っていました。」しかし、北本に引っ越してからしばらくは踊りからは遠ざかっていたそうです。「最初は地域とのつながりもほとんどなく、あきらめていました。子どもが生まれたことを機に、改めて踊れる場所を探し、北中丸囃子連の存在を知りました。皆さん温かく迎え入れてくださり、様々な行事で、親子で踊りを披露する場を与えていただき感謝しています。」

北中丸囃子連
石川直紀さん・航希君

ずっとお父さんと

踊りを披露するため、大会前の1か月間は、毎日のように練習を行い、踊りを体にたたき込みます。大変な練習量で辛いのでは、との問いに、航希君は「お父さんと必死に練習して、大会等で一緒に踊り、たくさんの拍手をもらえたときは本当に嬉しい。だから練習も頑張れる。ずっとお父さんと続けていきたい。」と笑顔で話していました。

郷土芸能は地域の誇り

北本市郷土芸能保存団体連合会　鯨井 重秋 会長

北本市では、かつて、東は氷川神社、西には須賀神社、八雲神社などで、氏子たちが一生懸命太鼓をたたきました。祭りともなれば、神社の境内には出店が並び、それを眺める人、また、祭りを司る人と本当ににぎわっていました。子どもたちはお父さん、お母さん、あるいはおじいちゃん、おばあちゃんからお小遣いをもらい出店を回ったものです。

郷土芸能は、地域に住む人たちにとって、なくてはならないものでした。消防団などの活動と同じように、地域に貢献し、地域の誇りでもありました。

しかし、そんなにぎやかな郷土の祭り、郷土芸能も、大戦後廃れてしまいました。お祭りで太鼓をたたける人を、役員さんたちがあちらこちらと探し回ったものです。そこで、保存・継承を目的に誰でも郷土芸能に取り組めるよう、昭和54年度に北本市郷土芸能保存団体連合会が設立されました。そして各団体の親ぼくと交流によって、なんとか今日まで伝統の火を消さないための努力を続けています。

最近では、地域のつながりが薄くなり、独居世帯や孤独死の増加などが大きな社会問題となっています。今こそ、お囃子などの地域の芸能に参加し、地域の人たちと交流を図っていくことは大事なことだと思います。

指導者の高齢化も進み、後継者の育成も依然として大きな課題です。多くの子どもたちに郷土芸能に親しみを持ってもらうためには、学校教育の場で郷土芸能に触れる機会を設けるなど、より一層の努力、工夫が必要となりますが、300年以上続いた郷土芸能の伝統を絶やさぬために、今後も積極的に活動していきたいと思います。